

8. 飼養環境調査を取り入れた肉用鶏農家における生産性向上への取り組み

豊後大野家畜保健衛生所

○下田洋子・(病鑑) 菅正和・(病鑑)堀浩司・芦刈美穂

【はじめに】管内の肉用鶏農家において、同一管理者による2鶏舎のうち1鶏舎で疾病が多発した。今回、病性鑑定や飼養環境調査の結果をもとに、出荷成績の改善に取り組んだので概要を報告する。

【農場および発生概要】当該農場は、2鶏舎約34,000羽飼養で堆積鶏糞を敷料として利用。14日齢、24日齢でND、IBDワクチンプログラムを設定しているが、投薬や消毒薬の使用に消極的。2号鶏舎において疾病の発生が多く、2014年1月以降、計8回の病性鑑定を実施し、鶏コクシジウム病、大腸菌症、壊疽性皮膚炎の発生を確認。2016年2月入雛群について、30日齢から死亡羽数が増加したため、病性鑑定を実施し、ペア血清採材。

【2月入雛群の病性鑑定成績】細菌学的検査では、諸臓器からエンテロコッカス、大腸菌、*Salmonella* spp.、黄色ブドウ球菌を分離。ウイルス学的検査では、IBV、CAV、FAV、IBDVの遺伝子を検出。IBDVについては農場使用ワクチン株と同一の遺伝子型を検出。病理組織学的検査から、ウイルスの関与を顕著に示す病理像を認めなかったが、ペア血清では、FAV(2型、8型)、IBV(C-78、TM-86、AK-01、練馬)で中和抗体価が有意に上昇しており、野外ウイルスの感作を確認。また、十二指腸にコクシジウムの寄生を確認。多数の病原体の関与が疑われたが、確定診断には至らなかった。

【出荷成績および飼養環境調査】2015年の出荷成績を調査したところ、1号鶏舎の平均出荷率は98%、2号鶏舎は94%。1号鶏舎の坪羽数は51羽、換気扇は内部と後部に16台配置。2号鶏舎は川沿いの窪地にあり鶏舎構造が直線ではなく、坪羽数は平均51羽、換気扇は14台配置。換気輪道試験として、空舎時に花火の煙玉を用い煙の流れを観察したところ、2号鶏舎の一部で換気状態が悪いことが判明。

【対策および結果】2号鶏舎では空舎期間の堆積発酵床の切り返し回数増。その後、環境拭き取り採材を実施したところ、*Salmonella* spp.が残存していたため、加えてホルマリン燻蒸を実施。定点温度計測(最高・最低気温)を開始し、その結果を元に換気扇の調整を一部変更。2号鶏舎5月入雛群において、定期的な抗体検査と糞便検査を実施しモニタリングを継続。コクシジウムオーシスト(*Eimeria brunetti*)の増加を確認、投薬。抗体検査では、FAV(2型、8型)の抗体価が有意に上昇したが、IBVの抗体価の上昇は確認されなかった。出荷成績は昨年同時期の出荷群よりも改善。

【まとめ】同一敷地内で同様に飼養されている1号鶏舎では疾病の発生による出荷成績の悪化が認められないことから、2号鶏舎との飼養環境の違いに着目し環境改善に取り組んだところ、一定の成果が得られた。今後は、疾病対策のみではなく管理者の飼養管理の効率化を図りたい。